

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 9 月 16 日現在

機関番号：32413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520689

研究課題名(和文) 英語教師の養成と教師研修プログラムの改善と支援のための教師認知的調査研究

研究課題名(英文) Teacher Cognition Studies for English Teacher Training and

## 研究代表者

清水 公男 (shimizu, kimio)

文京学院大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10516438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多くの英語教師が処理する3つの教室内情報(授業前情報・授業中情報・授業後情報)を、英語教師としての各経験段階にある英語教師が、各自の英語授業への思い、ヒューズ、個人のエピソード経験等を基に、教室内の諸情報を解釈・選択・活用・処理等しながら授業をどのようにデザインし、実践していくのかを実証的に調査し、実習生や授業経験の比較的少ない英語教師と経験を重ねつつある比較的若い教師を比較して、それぞれの英語授業に関する教師認知の記述モデルを作成した。その結果、教師経験によって、授業のどの点に着目して英語の授業実践を行っているかの差異を解明することができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to (1) examine the content of teaching experiences through which Japanese English teachers' professional development process occurs and how it takes place with the focus on three types of classroom information which many Japanese English teachers use in planning lessons and teaching practices, and (2) to make a descriptive model of English teachers' cognition in planning lessons and teaching practices. Those three kinds of information are as follows: 1) before-class information for ways of implementing a series of English lessons, 2) in-class (ongoing) information for the next lessons planned, and 3) after-class information for the improvement of lessons. How Japanese English teachers use such classroom information for teaching practices in their professional roles is observed on a case study basis.

研究分野：教師教育・授業研究・教育学・英語教育学

キーワード：英語教師教育 授業研究 教師認知 意志決定 教室内情報 授業力量

## 1. 研究開始当初の背景

1970年までは、教師が持つ知識とは、指導や学習に関わる研究や理論から得られた知見そのものであった。教師はそのような知見、すなわち外部から得られた知識を実践するいわばブラック・ボックスのような存在であり、教師志望の学生も含めた novice teacher は知識を得る前の空白の状態と見なされた。従って、教師養成プログラムにおいては、言語学や英米文学などの教授内容とともに効果的な指導モデル・技術をそのまま身につけることが求められた。この前提には、最良の指導方法があり、それは様々な教室環境で応用可能であるという理論的な枠組みが存在した(Freeman 2002, Johnson 1999)。これに対し、近年、教師の知識に関する研究が進むにつれ、この伝統的な見方についての限界が指摘されている(Borg 2003, Freeman 2002, Freeman & Johnson 1998, Johnson 1999 他)。その限界とは、教師とは各々言語の指導や学習についての多様な実践的知識や経験を持っており、研究者はそのことを十分に認識していない点にある。教師養成や研修プログラムにおいても、教師は与えられる知識を単に身につけるのではなく、教師自身の学習経験や既に持っている知識や信念というフィルターによって、各々理解や解釈が異なる、という点が認識されていない。更には、研究や理論から得られた知見と、実際に教師に内在し、授業を行う際に用いられている知識との間に齟齬があることが、実証的研究の進展とともに明らかになってきた。その結果、教師教育においては、これまでのように「いかに教えるべきか」だけの教育では不十分で、多様な学習者に対しての「教え方」の選択肢を多く用意し、それらの一つ一つを「いつ、どのような状況におかれた学習者に対して」、又「何故、どのような理由や認識に基づいて」使用するのかを、内省的に選択できる能力を育成することが必要であるという考え方が台頭してきている。

この考え方は、従来型の教師養成モデルとは異なり、教師の成長(teacher development)を促すものである。このモデルはこれまでの教え方に立脚しながらも、実践 省察 改善のサイクルを主体的に担いながら、状況に応じながら教師として自分を成長させていく自己研修型の考え方(Wallace 1996, Richards & Nunan 1990, Bailey et al. 2001)であり、教師教育のパラダイム・チェンジと言える。教師の資質はもはや不変的で固定的なものではなく、教師の成長の視点から見ても、教師は自らの認知的成長を常に把握し、特に自分の指導上における認知枠(テンプレート)が、どのようなものであり、それが適切なのか否

かを内省的に知る機会が必要である。その意

味でも内省(reflection)は教師の成長の核であり、その内省の範囲は学習者との教室内インターアクションにおいて、言語教師が何を信じ、何を考え、何を知っていて、何をしているのかなど広範囲に及ぶ。今後、教師は学習者から常にフィード・バックを得ることにより、自らの指導の問題点を観察し改善していくことを求められるが、その研究の理論的指針として Borg (2003)や Freeman (2002)の教師認知研究が現在クローズ・アップされている。英語教師の成長段階に着目した実証的研究は少ない。しかし、英語教育の分野では、教師の授業時の判断、思考、意志決定に関わる教師認知がいかに変わり、何が教師のピリーフとなり、何がそれを変化させ、どう変わっていくのかの過程と、変化要因や問題点を解明する実証的研究が、教師養成と現職教師研修の改善と向上のために求められている。

## 2. 研究の目的

英語教師教育に関する研究は、近年教育学等の影響を受け進展している。理由は、国内外の英語教育における学習者の多様化が、教師志望学生の意識や現職英語教師の信念の方向転換を迫り、英語教育をめぐる価値観の転換が求められているからである。

本研究は、教育学と心理学の研究成果を踏まえ、英語教師の抱える現状課題について検討しながら、授業改善をめざしながら常に成長していく教師のサポートと、教師教育(養成と研修)のプログラム改善に資する視点を提供するために、授業時の思考、判断、意志決定プロセスにおける教育実習生も含めた英語教師(新採等経験の浅い教師と経験を積んだ若い教師)の思考・認知等の特徴を実証的解明することをその目的とした。

## 3. 研究の方法

国外で始まった英語科の教師認知に関する研究は、国内においてはまだ途についたばかりである。まず、研究対象となる教師認知の構成要素とプロセスの明確化が必要であると考え、1年目に先行研究を整理し、研究対象とその解明に必要な研究方法を再整理することから始めた。その結果、教育工学的な授業研究(参与観察)と、授業者へのインタビュー、そして アンケート調査を採用することとした。尚、この調査研究者である現職の英語教師には、事前の許可(含む授業の映像又は音声記録の許可)を事前に取り付けた。

1年目(2012年)の後半からは、既に2010年の4月から開始した調査対象となる英語教師志望の教育実習中の大学生(研究者の教え子)と、英語教育の現場で活躍している初任の現職教師(研究者の元学生)の授業観察を

おこなうと同時に、授業実施時における教師の認知や信念等に関するアンケートや、聞き取り等による予備調査を実施し、本調査用のアンケート項目を精選した。次に、その項目の妥当性と信頼性を精査し、2年目以降に、本調査（東京都内、神奈川県、富山県、山梨県、愛知県の現職教師対象）を実施し、3年目に研究成果をまとめた。

研究のまとめ方としては、授業観察する対象数が限られていたので、アンケートで授業実践に関する英語教師の認知についての大規模調査と、授業観察で精緻な実証研究を同時に行い、最終的に両者のデータの照合をした。

尚、授業の参与観察については、東京都H市の教育委員会のご協力を受け、同市内の複数の小学校と中学校の現職の先生方の勤務校に於ける通常授業と、同市の公開研究授業に参加させて頂き、調査研究を進めた。

#### 4. 研究成果

どのような職域でも、体験を重ねるだけでは、その分野に関する力量を学ぶことは不可能である。ただの体験レベルにとどまるのか、又ある体験を経験レベルへと変えてその分野に関する実践的知識を獲得していけるかどうか、新たな知を創造できるか、否かを決定するといえる。

本研究の研究対象は、英語科における教師の「授業知」であり、その知を形成する教師の判断や意思決定等の授業認知とその形成プロセスとはどのようなものかを、解明するのがこの研究の目的であった。

教師の一連の意思決定や判断は何を判断材料としておこなわれているのかを考えるための糸口として、教師の授業に係る教室内の様々な情報収集活動を分類・分析した田中(1089)のフレーム・ワークを援用した。

田中によると、教師の収集する教室内情報とは教師が授業指導の前・中・後で何を見ているのかということの意味している。当然、教師の指導レパートリーの少なさや指導方法の未熟さ等による差に起因する情報収集方法のつたなさや、指導過程時の判断の誤り、状況の読み間違いや生徒の学習状況に関する感度の稚拙さや情報量の少なさ等もあるが、田中はどのような教科教育においても教師によって収集される情報は、授業開始前におこなう情報収集、授業中におこなう情報収集、そして、授業後におこなう情報収集に分類され、これらの情報活用の力量が教師の授業力量の差に関係していると指摘している。

田中のフレーム・ワークを基にして、実施したアンケート調査、授業観察とインタビューを行い、そのデータを分析してみると、英語教師による教室内の情報収集の目的と情

報の種類に関して次のような3つの知見がえられた。

##### 1. 授業開始前に収集される情報

（担当クラスの生徒の実態を把握するために）

生徒の習熟度・準備度等の把握、教材準備・教材研究と予想される生徒の反応、授業記録等による個人差の把握（授業設計のための基本形やアイデアの収集のために）

年間指導計画・教科書の理解による指導目標（どのような力をつけたいのか）の分析、

モデルとなる指導案・授業展開例と自分の授業プランとの比較検討、授業展開や生徒の授業内での言語活動計画・展開、さらに教材作り等のアイデアを学ぶために先輩・同僚教師の授業観察や助言を参照しながらの自分の授業の改善実施等

のタイプの情報を収集する時には、ベテラン教師の授業に参加させてもらうことや聞き取りが必要となる。何故なら、ベテラン教師の授業には教案に書かれていないものや、授業に対する「仕込み」作業等、更には授業中に現れる臨機応変な対応などが見られからである。この段階での情報収集は多くのベテラン教師にとっては、ほとんどルーチンワーク的におこなわれている事ばかりである。着目すべき点は、教育実習生や新任教師が授業の「型」作りに重きを置くのに対し、ある程度の経験を積んだ教師は「教材研究」を重視するようになるという事実である。その教材研究の中身は、例えば、(1)ある教材で扱われている言語材料はどのようなものか、(2)既習事項や他の（先の）レッスンとの関連をどうつけるのか、(3)この教材に対して生徒はどのような反応を示すだろうか、(4)補助的教材・ワークシート等を準備した方がいいのかどうか、(5)どこで生徒は躓くだろうか、などを経験のある教師は予測している。英語学習はスパイラルな学習の連続であることを考えると、(2)のような点に配慮することなどはある意味当然のことだと考えられる。要するに、自分の生徒は、今、何をしり、何を知らないのか、又、何がどこまででき、どこからできないかを把握する必要が生じるのである。

##### 2. 授業中に収集される情報

（授業計画の微調整・変更等をおこなうために）

授業プランと実践のズレのモニタリング、生徒の理解度と関心の程度の把握、授業時間の配分

（指導時の即時的な判断を助けるために）

指名をした生徒としていない生徒の把握、生徒の反応のタイプの理解、生徒の英語の誤用への feedback の仕方

（授業後の反省と次の授業に役立てるために）

授業中の記録（良かった点・要改善の点・納得のいかなかった点等） 気になる生徒の反応と行動

### 3. 授業終了後に収集される情報

\* この段階で収集される情報は自らの授業改善と次時の授業へのフィードバック・フィードフォワードに役立つ目的で収集される情報である。

（生徒の学習理解状況を把握するために）

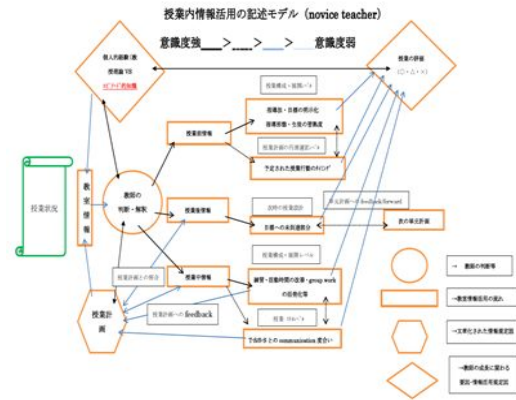
発問への反応、 クラス内の言語活動への参加度、 小テストの結果等

（教師の自己評価のために）

授業日誌（記録）等の継続的記入、 生徒からの授業評価、 授業のビデオ撮り・音声（発話）記録等（自己の振り返りや他者からの評価をうけるために）

授業実践に関するこのような教室内情報について、実習生からベテラン教師までを対象にして、英語教師の認知を、実際の授業を見て比較すると、収集情報量とその活用に関して、質的にも量的にも大きな差があることがよりはっきりとわかった。例えば、今回調査した実習生・新採教師と数年の経験を経た英語教師の授業を参与観察し、授業者にインタビューをおこなってみると、彼らが授業の前・中・後に実に多くの出来事を観察し、その情報を授業実践に活かすことができるようになってきていることが分かった。まだ不慣れな点も散見されるが、多少なりとも経験を積むにつれて、情報収集の範囲が広がり、しかも収集された情報の質とその情報の解釈と相互の関連づけが授業指導に柔軟かつ効果的に活かされていることも確認できた。

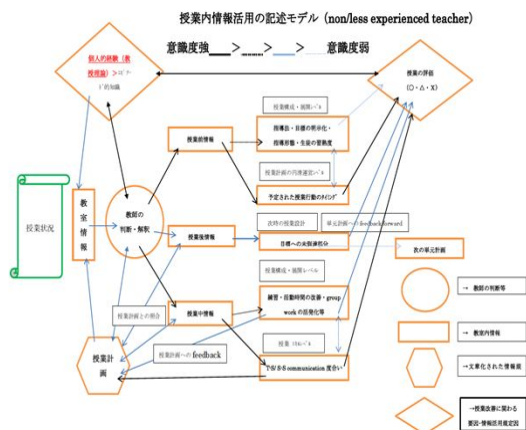
下の2つの図は、上が実習生や経験の浅い教師の、下は新採から数年の経験を重ねた教師の教室内情報に関する授業実践を行う時の、教師認知の実態を、今回の研究の帰結として図式化したものある。



複数の授業を見て、上の図を作成する時に気づいたことは、両者とも授業計画（予定）との照合を意識し、表面上は同じように授業をおこなっているということである。一方で、実習生や新採教師は生徒との良好なコミュニケーション（いわゆる盛り上がり）を維持したり・活発化したいという意識がやや強い傾向があるのに対して、後者の教師は英語の言語活動（新学習指導要領では、中・高ともに文法指導を言語活動に関連づけて行う、いわゆるフォーカス・オン・フォームの指導における言語活動）に費やす時間配分と活動自体の中身や生徒の取り組み度合い等を考えながら、いつ、どのようにその活動を切り上げたり、追加（または補足）の展開へとつなげていくべきか、更には、活動終了後に生徒にどのようなフィード・バックをおこなったらいいのか等までも同時に考えていることが、授業後の振り返りインタビューで分かった。

別の事例において、以下の差異も見られた。例えば、少し難しいD難度の新出事項（文法事項）を初めて指導する時には、生徒のレベルがAレベルなら「A B C D」と細かく small step で教えるべきであるが、前者の教師はAのレベルの見極めが甘く、「Aはもうやって、分かっているよね」という程度の認識で、実際はBから指導をスタートし、後になって（Dの段階の説明をする段階で）生徒が混乱するケースがただあった。又、気づかぬうちに、「A C D」と途中を飛ばしてしまうケースも散見された。このような説明は生徒にとってはわかりにくく、繰り返すうちに生徒が離れていったりする。これに対し、後者の教師は、「Aは知っているな」という確認からはいい、生徒は安心して最終段階までの説明を聞くことができていた。

もう1つの事例は、中学校でよくある、「過去形」と「現在完了形」の違いを教える場面の事例である。これは先の small step を踏まなかった時の失敗事例である。多くの中学生は、「宿題済ませたよ」という時に、1



finished my homework. と I have finished my homework. を、日本語の「～した」に引きずられて混同し理解するケースが多い。この場合、経験のない(浅い)教師は、日本語と差異に起因する混乱の原因を生徒に説明する必要があることを忘れ、「完了・終了したこと」を「今かかえて(have して)いる」のが過去形でなく、現在完了であると、単なる文法知識の側面から説明しがちである。この説明自体は、決して間違っていない。しかし、日本語との「関連づけ」の step を踏まなかったこの事例では、後々の writing や speaking での言語動場面、過去形と現在完了形をうまく使い分けて使用できない生徒が多かった。このような場合、後者の教師は、自分も同じ失敗をしたことを紹介しながら、自分なりに授業中と授業後の生徒の質問や疑問からヒントをえて、日本語との「関連づけ」を授業に取り入れうまく対応できたことを語ってくれた。これは、英語教師が教室内の情報をうまく入手し、それを授業の指導に活かした事例といえる。

今回の事例研究で分かったのは、英語教師は様々な教室内情報を基に授業をデザインし授業実践をおこなっていることである。そしてその情報をどのように解釈・判断し、授業に活かしていくのかはそれぞれの英語教師の経験知に困っていることも分かった。

今後は、この研究を更に進め、英語の授業場面における多くの問題場面(critical cases)において、どのように適切な判断や対応を英語教師がとりうるのかの指針や判断基準を見いだしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

清水公男(2012)「英語教師の学びの成長に必要なものは何か? 制度か? それとも?」『月刊英語教育』vol.61.No.7、24-p26

清水公男(2013)「現職英語教師の自主的な学びを促す授業実践行動チェック(評価)項目リスト Ver.1.1 の開発」中部地区英語教育学会紀要 vol. 42、227-234

清水公男(2013)「成長する英語教師の自主的研修方略 現職英語教師の自主的な学びを促す授業実践行動チェック(評価)項目リスト Ver.1.1 の活用可能性」木更津高専研究紀要 46号、35-43

清水公男(2014)「英語教師の授業力量チェック指標の妥当性検証から見えるもの」中部地区英語教育学会 2011~13 年度課題別研究プロジェクト報告書、43-58

清水公男(2015)「英語の授業改善と英語教師の成長のための教育工学的授業分析と授業研究の可能性」言語文化学会論集、No.42、105-119

〔学会発表〕(計8件)

清水公男(2012)「教師の成長を支援するための自己省察のチェックリストの開発」第42回中部地区英語教育学会岐阜大会、6.22

清水公男(2013)「授業力量チェック指標の検証から見えるもの」第43回中部地区英語教育学会(富山大) 6.28

清水公男(2013)「英語教師成長をめざす授業実習における教師意志決定に関する基礎的研究」第39回全国英語教育学会(北星学園大学) 8.10

清水公男(2013)「英語教師の力量形成に関する事例研究-教育実習生と若手教師の授業設計・実践の比較検証」第29回日本教育工学会全国大会(秋田大) 9.21

清水公男(2013)「英語教師の力量形成に関する事例研究」JACETSIG 言語教師認知研究会定例研究発表会(立教大) 10.12

清水公男(2014)「英語科授業における教師の思考様式に関する一考察」第44回中部地区英語教育学会(山梨大) 6.28

清水公男(2014)「英語科教師の力量形成に関する一考察 状況把握・判断・選択としての思考様式」第40回全国英語教育学会(徳島大) 8.9

Shimizu Kimio(2014)、“What is peculiar to the professional development of experience and less experienced English teachers of primary and secondary school in Japan?” WALIS 2014 世界大会(インドネシア国立教育大学) 11.28

〔産業財産権〕

出願状況

該当なし

取得状況

該当なし

〔その他〕

該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

清水公男(Shimizu Kimio)

文京学院大学外国語学部

英語コミュニケーション学科・准教授

研究者番号: 10516433

### (2) 研究分担者

該当なし

### (3) 連携研究者

該当なし